

功 勞 賞

高橋利枝氏 [東京大学大学院医学系研究科, 薬学士]



高橋利枝氏は、徳島文理大学薬学部を卒業後、浜松医科大学第二内科学講座非常勤研究助手を経て、1985年8月より浜松医科大学に文部技官として採用され、医学部附属実験実習機器センターに配属された。実験実習機器センターにおいては、共通機器室ならびに大型機器室の担当となり、質量分析装置、細胞解析・分取装置（フローサイトメーター）、蛋白質一次構造解析装置（ペプチドシーケンサー）などの大型分析装置の管理、運営ならびに依頼分析に従事した。液体クロマトグラフ質量分析計の新規導入に伴い、Frit-FAB インターフェースを駆使して、学内からの生体由来化合物の依頼分析に手腕を発揮した。分析対象は多岐にわたり、法医学分野、脂質分野、タンパク質分野などさまざまな研究領域の試料を扱い、質量分析の分析技能を向上させていった。その中で家族性アミロイドニューロパチーの病態解析のためのアミロイドタンパク質とその前駆体の分析研究に大きな貢献をした。一連の研究は質量分析連合討論会において発表を行った。

1991年9月に東京大学医学部第二生化学教室の助手となり、医学部内に導入・設置された大型共通機器である質量分析計、画像解析装置、細胞解析・分取装置などの運営・管理を担当し、現在に至っている。当初はHX-110 (JEOL) の運用を中心に数種の分析機器を扱っていたが、現在では質量分析計だけでもTSQ7000, TSQ Quantum, LCQ (Thermo Fisher Scientific), AXIMA-CFR, LCMS-IT-TOF (Shimadzu), Q-ToF micro (Waters) を管理運営している。1994年には、東京大学医学部第二生化学教室（現・東京大学大学院医学系研究科分子細胞生物学専攻生化学分子生物学細胞情報部門）の清水孝雄教授の主要テーマであるアラキドン酸カスケードに関連する研究で、Leukotriene B₄ (LTB₄) の不活化経路の詳細を質量分析により分子レベルで解明し、この研究に非常に大きな貢献をした。また、液体クロマトグラフィータンデム質量分析を用いた脂質メディエーターの一斉微量定量法の開発やアポトーシス時の迅速検出法として細胞外に放出される cytochrome c の微量測定にマトリックス支援レーザー脱離イオン化飛行時間型質量分析計が有用であることを示し、生化学分野への質量分析法の応用を試みている。

高橋氏は本学会の活動においては、1998年5月開催の第46回質量分析総合討論会（高崎）、2001年6月開催の第49回質量分析総合討論会（東京）の実行委員として、質量分析講習会においては1997～1999年、2001～2003年、2005～2007年の3期にわたり企画委員としてかわり質量分析講習会の運営に尽力した。BMS コンファレンスにおいては、第20回（山梨・石和）、第26回（長野・蓼科）、第27回（兵庫・神戸）、第29回（山梨・ハヶ岳）、第32回（北海道・大沼）、第35回（福島・裏磐梯）で実行委員として運営に携わり、集会の成功に多大な貢献をしたことは、本学会員諸氏の知るところである。また、本学会員である田中耕一氏がノーベル賞を受賞した直後の2002年11月に開催された日本質量分析学会創立50周年記念若手講演会（東京）で実行委員を務め、報道関係者などで混乱する中、滞りなく講演会を執り行った。このほか数多くの会合においてその運営に関する的確なアドバイスを提供し、本学会の対外的な活動の質の向上に大きく貢献した。2007～2008年度の学会委員も務め、幅広く本学会活動に携わっている。

以上のように、高橋利枝氏は長年にわたって共同利用機器としての質量分析計の役割の向上に努めてきた。さらには本学会の活動にも深くかわりその活動を底辺から支えてきた。よって2009年度日本質量分析学会功労賞に相応しいと認められた。

（日本質量分析学会表彰委員会）